

# モスクワ国立言語大学における 翻訳・通訳者の養成

ロシア モスクワ国立言語大学 通訳翻訳学部 日本語学科学科長

ミーシナ マリーナ

このコーナーでは、特色ある日本語教育を実践している機関の教師の方々に、現場のコースデザインやコース運営の状況について、紹介していただきます。

## 1 主な目的

翻訳・通訳者は異文化間コミュニケーションにおいて、仲介の役を務めている。自分の考えではなく、他人の書いたことや話したことを異なる言語によって伝えるため、高度な語学力はもちろん、両文化に関する知識、それに訳す能力、および技術が求められている。それらを身に付けるのが翻訳・通訳教育の主目標であり、養成プログラムの学習目的となっている。

## 2 翻訳・通訳者の養成プログラム

モスクワ国立言語大学には、長い歴史を持つ規模の大きな翻訳通訳専攻の学部がある。日本語翻訳・通訳者の

養成プログラムは、この大学に日本語学科が設立された1990年から実施された。このプログラムはナショナルスタンダードに基づいて開発されたもので、日本語の他に、特殊な日本語翻訳・通訳課程や日本文化研究課程が含まれており、総合的な教育が行われているのが大きな特徴である。

教育期間は5年間で、コースデザイン、学習の主な内容、授業時間は下表の通りである。

対象者は17～23歳の大学生で、1クラスの学生人数は5～8名である。日本語学科の教育スタッフは10名（1名は日本人のパート講師）で、全員日本語教育経験が長く、翻訳・通訳の経験もある。各教師は1つの学年の日本語授業を指導すると共に、他の専門科目も担当している。

課程 科目	日本語				日本研究	
	日本語学	日本語	日本語学	日本語	日本事情	日本事情
授業	講義・ディスカッション・ 論文発表会	演習	講義・ディスカッション・ 論文発表会	演習	講義・ディスカッション・ 論文発表会	演習
学年	年間時間数 内容	年間時間数 内容	年間時間数 内容	年間時間数 内容	年間時間数 内容	年間時間数 内容
1	38 音声学	570 初級の文法・漢字・語彙 読解・聴解・会話・作文	76 76	76 76	76 76	76 76
2	76 文法論	608 中級の文法・漢字・語彙 読解・聴解・会話・作文	76 76	76 76	76 76	76 76
3	76 語彙学、文体論	380 中級～上級 同上	—	—	—	—
4	—	228 上級 同上	76	76	76	76
5	—	112 上級 同上	56	56	56	56
合計 時間数	190	1,898	—	284	—	—

課程 科目	翻訳・通訳							
	日本語翻訳・通訳論	和露翻訳	露和翻訳	通訳	日本語翻訳・通訳論	和露翻訳	露和翻訳	通訳
授業	講義・ディスカッション・ 論文発表会	演習	演習	演習	講義・ディスカッション・ 論文発表会	演習	演習	演習
学年	年間時間数 内容	年間時間数 内容	年間時間数 内容	年間時間数 内容	年間時間数 内容	年間時間数 内容	年間時間数 内容	年間時間数 内容
1	—	—	—	—	—	—	—	—
2	—	—	—	—	—	—	—	—
3	76 和露翻訳 通訳特徴	152 和露翻訳 基礎練習	—	—	76 日本語翻訳・通訳論	152 和露翻訳 基礎練習	—	—
4	—	76 専門分野 翻訳	114 専門分野 翻訳	96 専門分野 通訳	—	76 専門分野 翻訳	114 専門分野 翻訳	96 専門分野 通訳
5	—	56 専門分野 翻訳	112 専門分野 翻訳	112 専門分野 通訳	—	56 専門分野 翻訳	112 専門分野 翻訳	112 専門分野 通訳
合計 時間数	76	284	226	208	76	284	226	208



5年生 論文発表会

る（授業担当の内訳は4名が翻訳、2名が日本語研究、2名が通訳、1名が日本語学、1名が日本語翻訳・通訳論）各クラスは3～4名の教師が受持つため、チームティーチングが必要となっている。各科目の授業で学んだことを、他の授業でどうやって活かしていくか、何に注意を集中すべきかなどを話し合っている。教務スタッフは全員集まって、各レベルの教育上の問題点、教授法、使用教材などについて話し合ったりする。翻訳・通訳学部の教授委員会が開く会議にも参加し、発表するケースも多い。

### 3 翻訳の教育

翻訳の教育は中級レベル（3年生）から始まり、日本語の授業と並行して行われているが、学習目的や教え方には違うものもある。日本語の授業はコミュニケーション的な方法が主な教授法となっているが、主要教材は日本で出版された教科書（「日本語初歩」、「総合日本語中級」、「現代日本語コース」Vol.3～4、「テーマ別上級で学ぶ日本語」など）で、会話・作文などの授業にはロシア語を使わないようにしている。しかし、文法・読解・聴解の授業では訳す練習をすることがある。この練習の目的は訳す能力を育てることではなく、日本語とロシア語の文法・表現・単語の比較を通して、日本語の理解を深めるといことである。

一方、翻訳活動の主要目標は、原文を他の言語によって正確に完全に表現するということである。そのため内容はもちろん、原文の形式的特徴（語句、言い回し、構文、文体）まで、いかに伝えるかを重視しなければならない。

日本語とロシア語は言語構造が著しく異なる。よって訳す能力の基礎を置く第一の段階においては、ロシア語にはない訳しにくい構文・句型などの分析・訳し方が学

習の重点となっている。教材としては、中級用の日本語のテキストや日本の新聞に出ている難しくない小さな記事を使う。内容は最初の段階から、日本事情、日本や世界で話題になっていることを紹介する原文を選び、授業をよりおもしろくするように努力している。

上級クラスでは経済・政治・社会・文化・科学技術・ビジネスなどの各専門分野のテキストの翻訳の練習をしている。ジャンルの異なる原文を訳す力を育てるために、広告・説明書から解説・コミュニケ（公式外交声明）契約書まで、様々な文章を教材として使っている。

日本語はロシア語よりコンテキストの役割が大きく、表現構造と意味構造がかなり離れている言語である。その意味で代表的なテキストを選んで、日本人論、日本人の考え方、特有倫理についての知識を増やす。

各テーマの学習は、翻訳する原文に出てくる、キーになる新しい単語・表現の導入から始まり、その後、学生は原文に目を通して、そのテーマ、ジャンル、アイデア、文体などを日本語で討議する。次にテキストを黙読しながら口頭で訳す。翻訳そのものはテストや試験の場を除いて、宿題としてやっている（分量は1,000字くらい）。また、各種の辞典を使いながら単語帳を作り、単語の意味の他に、その使い方・訳し方にも注意を向ける。

授業では学生が作った翻訳文の分析を行い、その良い点や間違いについて、クラス全員で話し合う。このような指導方法によって、原文により近く、より正確な翻訳の能力が養われると同時に、ロシア語の表現力をも高め

ている。露和翻訳の授業は、4年生のクラスからスタートし、ロシア語ができる日本人講師が指導し、和露翻訳を担当するロシア人講師とチームティーチングをしながら、共通のテーマの露文（主にロシアの新聞などに出ている日本についての記事・論文など）の内容を、クラス全員が日本語で話し合ったり訳す練習などをして、日本語能力や翻訳スキルを伸ばす。

卒業論文としては、5年生はそれぞれのテーマ（言語学、翻訳・通訳論、日本研究など）を研究して、そのテーマに関する翻訳文（30～40ページ）を自分で作り、それを研究論文と合わせて提出することになっている。

### 4 通訳の教育

通訳の授業は4、5年生のクラスで行われており、仲介・逐次通訳に重点を置いている（同時通訳は大学教育のプログラムに含まれていない）。

通訳者に出来ること、要求されることは、そもそも翻





5年生 ロールプレイ

訳とは別のものである。時間的な制約の中で、発言の主旨や、その場での情報的な価値を持つもの全てを、いかに早く異なった言語で伝えるかが通訳の第一の課題となっている。一連の行動（聞きながら理解・判断すると共に、記憶しメモをとる）を、ほぼ同時に行わなければならないため、高度な言語運用能力のほかに注意力・集中力・高い記憶力・反応能力などが、強く求められる。これらを身に付けるのに特別な訓練システムが必要である。

日本語学科では、このような総合的な訓練を目指す教授法が開発され、1994年に国際交流基金日本語国際センターの協力により、フェロシッププログラムの中で「中級における和露・露和通訳」という教科書が作成された（市販教材、カセットテープ付き）。以来、4、5年生のクラスではこの教材を中心とした授業を週2回、各2時間行っている。

テーマは、通訳の対象となることの多いガイド・観光・紹介・報告・会議・スピーチ・座談会・インタビューなどである。本文のほかに色々な通訳技術練習もある。

各テーマの学習は、聞く練習から始まる。本文に出てくる主なキーワード（単語・表現・固有名詞・数字）を聞きながらポーズのところで訳し、次にもう一度終わりまで7語ずつ聞いて、言葉の出た順序通りに繰り返し訳すという、基礎練習である。これは注意力や記憶力が高まると同時に、新語も自然に身につく効果がある。

次に本文に出てくる決まり表現・言い回しなどを聞いて、ポーズのところで訳した後で、正しい露訳を聞き、また日本語に訳す訓練をする。このような練習方法は日本語への対応力・反応能力と共に、ロシア語表現能力も伸ばす。

更に、本文を聞きながら要点をノートに書き取り、情報的な価値を持つものを選ぶ練習をする。その後で本文の各文・各節をそれぞれのポーズのところで訳す。宿題

としては、本文を聞きながらテープを止めず同時に繰り返す練習、同時通訳する練習を指示している。この方法により、「聞きながら話す」スキル、集中力、ロシア語表現能力、速いスピードで話す力などが養われる。

次の段階では、その学習テーマのジャンルによく使われている日本語の文型、言い回し、構文、特にロシア語に訳しにくいパターンの使い方・訳し方の練習をするが、これはペアワークの形で行う。1人の学生が例にならって日本語の文を作り（またはロシア語から訳し）、相手の学生は、その日本語をロシア語に訳す。クラス全員が同時に練習出来るため、授業はインテンシブなものになる。

仕事が公式の場で行われることの多い通訳者には、敬語表現能力が強く求められる。コミュニケーションの参加者やその場の状況により、敬語表現の使い分け、使い方、訳し方の訓練を目指す場面練習も各テーマの勉強の重点となり、特に仲介通訳を練習するロールプレイに、学生の興味が集まる。

最後は、訳すスキル全てを求める逐次通訳練習のコントロールを目指す。訳すテキストには、学習した表現のほとんどが盛り込まれているが、内容的には全く新しい和文・露文となっており、学生には通訳の現場に近いという実感がある。このような練習を重ねながら、自信を持って通訳に取り組み能力を養っている。

## 5 今後の課題

現在は、以前の経験や明らかになった問題点・研究をまとめ、各科目の教育コーディネーションを一層強化し、総合的な教授・教材システムを制作する課題に取り組んでいる。特に中級用翻訳教材を開発し、上級レベルにおけるプロとして通用する実力を伸ばす、総合的な翻訳・通訳教材を作成する必要がある。その点ではカリキュラムも見直す必要がある。この教材作成のプランが実現すれば翻訳・通訳者養成の一層の強化になるであろう。



5年生 ペアワーク